

ビブリア

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 図. 書 委 員 会
昭和55年12月20日

No. 41

福島高専 図書館報

◇ 巻頭言 ◇

読まず嫌いになるなかれ

図書館委員

土木工学科 根 岸 嘉 和

現在、我が福島高専付属図書館には、総数五万冊に及ぶ、各種方面の図書が、学生諸君の利用を待っている。この数は、学生諸君が読書環境に、大変恵まれている事を示すものと言えるであろう。

しかし、反面、現実の利用率はと言うと、この図書館が十分に、その機能を発揮しているとは見るには、不十分な値に留まっているのである。

この低利用率の原因を、各方面から検討し、利用者の声を反映させた結果。複雑な手数を煩わす事なく、少しでも手軽に、図書館を利用してもらえる様に、とのねらいから、学生の図書館利用手続きを、簡略化しようとする試みが、少しずつ実行に移されようとしている。

この事は、図書館を利用する側にとっては、本質的でない障害によって、その読書意欲が削がれてしまうのを避ける意味で、大変意義があると思う。また、これらの改善の努力が、図書館利用度の増大に、つながる事を、心から念ずるものである。

しかし、何事も手軽に、気安く、簡単にと願うのは、インスタント食品時代に慣らされた、我々の世代の、最も警戒すべき傾向ではないのだろうか。

言うまでもなく、図書館の利用度を引き上げる、根本的な原動力は、利用する学生諸君の、読書意欲そのものに他ならないのである。

読書に対する意欲は、読書という行為の中に潜む素

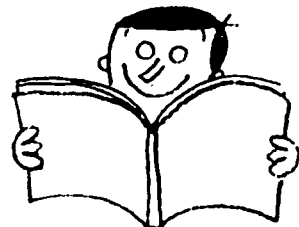
晴しい世界を、各自が発見する事によってのみ、湧いて来るものであろう。しかしそれを発見するためには、誰もが一度は、自己の心奥にある甘えと戦いながら、じっと活字を追うという、単調な時間を耐え忍ぶ事が要求されるのである。

それは、口で言う程たやすい事ではないかも知れない、しかし、苦労が大きい程、得る物も大きく、楽をして得る物は小さい。これは、読書の習慣を身につける上においても、例外ではないだろう。

食わず嫌いという言葉があるが、「自分は、活字を追う行為を面倒がる余り、読まず嫌いになってはいないだろうか。」と考えて欲しい。

そして、もしそうであるなら、この読まず嫌いから抜け出すには、一度自分を虐(いじ)めて、読書の世界への目を開かせる事に、自から進んで取り組む姿勢がなくてはなるまい。

読書に王道なし、読まず嫌いにだけは、ならないで欲しいと、願うのである。



Student Apathy と Sturm und Drang と — 人間 野口英世の伝記小説 —

機械工学科 窪 田 暲 二

渡辺淳一著「遠き落日」 上下、角川書店（980円×2）- 913.6

いくつかの偉人伝とか著名人の伝記とかを聞いたり、読んだりした中で、野口英世ほど強く心に残っているものはない。何故なのだろうか？その理由はさまざまである。

・野口英世にシュバイツァーやキューリーなどとは違った味の、ある種の身近かさを感じるのである。日本人であるという理由によることは勿論のこと、会津に生まれ育った私には郷土の偉人として幼い頃から先生、両親、その他の大人達から事あるごとに、刻苦勉勵の手本として聞かされてきたからでもある。

・生活破綻者たる父親を持って、極貧のうちに生まれ育ったという恵まれない家庭環境の中に、その出発があったが、母親の言語に絶する辛苦、我が子、彼への愛情、そして親と子の心の絆をあらわすエピソードには心をうたれるものがある。

・医学という自然科学の分野では、論理的思考やその展開のために不可欠の基礎的学問のトレーニングが、より以上に必要で、それを身につける最も有効な場が学校であるが、この正規の学校教育を経ていない野口英世が、世界的名声を博するほどの学者になったのまわば独学によってである。

・一般人にはとうてい及びえない天才ではなく、ひよっとするとなれるかもしれない努力家であるといつてよいのかもしれない。（もっとも、人並みはずれた努力ができること自体、天才といつてよいのかもしれないが）

ただ、その努力のしかたが桁はずれで、いわば超々3Lサイズなのである。生命力溢れる激烈な人生が、我々並サイズの者に、驚嘆的に心にひびくのである。

・一方、さまざまな人間としての欠点、いや劣悪とさえ思えるほどの、いわば欠陥人間とさえ思われる面をもつ。甚だ凡俗で人間臭い人間と言ってもよいであろう。

・彼にまつわる話から人生というものは、人と人との巡り合わせに大きな意味があるということを考えさせられる。好意と善意に満ちた人々に恵まれ、その師弟、親子、友人など英世をとりまくさまざまな人間関係に、いいしれぬ感懐をいだかせられる。

・そして、仕事なかばにして自らの研究素材によって自らの生命を断たれるという悲劇的終末も美的であると同時に偉人の生涯の終わりにふさわしい幕切れでさえあるとの感を深くする。

この本には、恵まれない生い立ち、借金や放蕩などにみる醜悪な性情と猛烈な努力ぶりの織りなす青年時代、渡米に至るまでの研究者としての揺籃期、ロックフェラー医学研究所入所から学士院恩賜賞や世界的な数々の名誉賞の受賞を経て一時帰国に至る絶頂期、最後に黄熱病研究着手後の孤独と失意の中の晩年と地の果てアフリカの一角での終末までの英世の生涯が克明に描き出されている。とりわけ、世界をまたにかけた研究生活の推移と、仕事以外の彼の横顔、思想、思考、性格の一端、恩師、親、妻、友人、知人、後輩などとの人間関係が、豊富な調査資料を縦横に駆使して、専門家ならではの迫力で描き出されているのである。

著者が「あとがき」で言っているように、著者の彼に対する愛情と破天荒で強烈な魅力が、この作品を生み出す原動力になったというにふさわしい力作である。数ある伝記の中の逸品の一つであるとの評も、読んでみて宜（むべ）なるかなである。

ともあれ、この書の主人公は極貧・片輪・無学歴という色々なハンディに屈したり、甘えたりすることなく、むしろこれらの逆境や悪条件を激しい情熱と旺盛な向学心に転化させ、そして、活力に満ち溢れたなどという通り一べんの形容ではもの足りない、まさに、標題の疾風怒濤的な生きざまを示したことは確かである。無気力などと嘆かれている当今の一部の若者に、何らかの刺戟やら感動やらを与えてくれることを願うものである。

とにかく、一読をすすめたい。なお、この作品は吉川英治賞を受賞している。 (55.12.3)

(附記 本書はビブリアNo.37(今年2月発行)の「読んでみませんか」で紹介しておきました。)

よい読書、よい図書館を

学生図書委員 2土 阿部修司

今日の人々に欠けているものといえば、読書を愉しむということではないでしょうか。なぜなら、本を読むことによって、自己の内的経験を与えられて驚きと喜びが生まれ、また、本の中の人物の性格・生き方や背景を考えさせることで想像性を豊かにしてくれるのです。また、読者自身の人生をかえることだってあるかもしれないのです。このように新しいもの、自分に持っていないものを、与えてくれるのが本の役割だと僕は考えています。

ただし、まちがわないうでほしいのですが、新しい本だけでなく、以前に読んだ本で感動・印象が強く心に残ったものなどを読み直すことも大切なことです。書棚や図書館でふと目にとまった本を読み返すうちに、書物の中の世界と自分の人生的世界を見くらべることで、過ぎ去ったことへの親しみさえ感じさせ、それはまるで旧友に再会する愉しみに似ていて、なにものにも換えがたいものです。それらを与えるのが読書なのです。

さて、そのためには図書館には多くの良書が置かれ

てあるわけですが、いざ本を借りるとき、めんどくさいとか、帯出票を作っていないとか、図書館の本など必要ないという学生がいるかもしれないということですから。そのような学生が多くなると図書館利用率も低くなり、学生全体がしだいに本から遠ざかっていくことになるのではないのでしょうか。

このため、それらをなくすために各種の機会に各クラスの図書館員に意見を出してみたらどうでしょうか。そうすれば、図書委員会でその意見はそくぎに検討されて、要望が実現されるように努められるでしょう。このルートがうまく活用されるならば、学生の意見を充分に取り入れた図書館をつくることができ、利用率も高まると思われます。そのため、図書委員・図書館職員・学生図書委員などを利用してほしいと思います。

最後に、読書は人間を向上させるものであるから、良書に対する関心を高め、よりいっそう本に親しくなるように考えてほしい。

「この一冊」とその様々な受容

蘭学事始

杉田玄白

岩波文庫

わが国洋学の祖杉田玄白が、18世紀後半における蘭学研究の経緯を、後生のために書き残した記録。玄白を中心とする数人はオランダの医書「解体新書」翻訳のため言語に絶する苦心をしている。この難事業の完成が実に西洋医学への道をひらき、今日に至る洋学研究の隆盛を招く端緒となった。

4M 志比奈 忠

或る（確実にあった）時代-generation に生きた人人のドラマを、かいま見た思いがする。

この「蘭学事始」は、杉田玄白個人の回想記という形式によって書かれてあるが、この本のメインをなす箇所は、やはり、かの四人が「ターヘルアナム」の訳出を目的として結社を組むところから「解体新書」

の出版までの部分と言って良いだろう。

玄白と良沢、ほとんどこの二人の働きによって「解体新書」は世に出た。しかし、一見その同じ目的のために立ったとみられる二人だったが、彼らの野心はそれぞれ異なる方向を見ていた。玄白は、医学書「ターヘルアナム」の訳出、そして「解体新書」の出版によって、その〈時代〉への働きかけをしようとした。一方、良沢は、一当時人の捨ててせぬオランダ語の修得をく彼自身〉の蘭学であるとして、その業を行な

った。

およそ先駆者と呼ばれる者は、〈時代〉に目覚めた者である。しかし一方、それとはほとんどかわり合うことなしに、〈内部〉に目覚めた者の強い意志が、その生みだした結果を通じて、そのように評価される場合もある。ここで前者が玄白、後者が良沢であるとして良いと思う。しかし、彼らの〈人格〉に対して、その優劣を問うことはできない。

対立する存在は、それ故に、一そう強く意識し合う。二人は互いに、異質な他の人格を認め合うことで、翻訳の進行を計ったが、そこにジレンマが全くなかったわけではないだろう。魯十文字——良沢を気づかいつつその印を付けることを促す玄白と、それに抵抗を覚える良沢。その印は、両者のジレンマを象徴している。

しかし、その印が両者を結びつけていたとも考え得る。年月を経るに従い、その印は少しずつ消えて行った。そして、彼らが志を立てた四年の後には、「解体新書」という成果が残った。しかし、それと共に二人は離れて行ってしまった。

「蘭学事始」は、以前に歴史の教科書で読んだ、フルヘッヘンドの挿話以上に興味深いものを持っている。それは、〈時代〉を問わず、僕らが考えるべきく人の生き様〉である。

4 E 遠 藤 昭

この「蘭学事始」は江戸時代に書かれたものであるから、当然、文語体で書かれているわけだが、先に読んだ柴五郎「ある明治人の記録」同様、わたしにとっては非常に読みにくかった。難しい助動詞の用法、見慣れない旧漢字等、意味をつかむのに相当苦勞した。わたしなんか、この程度でつまづいているのだから、ましてや、単語の意味もろくにわからない異国の言葉で書かれた本を、日本語にわかりやすく訳すという仕事といったら、相当に、つらく、険しい道だったことであろう。わたしの苦勞など、これと比べれば、針の先ぐらいにしかすぎないだろう。

何故なら、わたしの場合は、すぐそばに、古語辞典や国語辞典・漢和辞典等という強い味方があって、これらを借りることによって大部分の意味をつかむことが出来るからである。それよりも前に、文語体で書かれているとはいっても、日本語に違いはないのだから。しかし、玄白らの場合は、調べようにも参考にすべきものがなく、すべて自力でやるほかなかったのである。

この事に関する彼らの苦勞は、本文でも詳しく述べられているが、全く頭の下がる思いであった。

この本の最後の章を読んでもわかることだが、彼、杉田玄白は、本当に蘭学の発展を、医学の発展を望んでいたのである。そして、彼らの努力は、医学の発展に大きく貢献したのであった。

最後に、この『蘭学事始』を読んで、興味を引かれた点の一つあった。それは、平賀源内の事である。エレキテルで知られている平賀源内と杉田玄白とが知り合いだったとは、わたしにとって意外な発見だった。

4 C 石 沢 朝 香

いつの時代でも、人より一步先んじて何かを始める人というのは、それだけで偉い。

それは、その道を開拓するための強い志と、闇にほうり出されたとしても、孤独に対して負けることのない精神力をもっているからである。

この本の主人公、杉田玄白などは、その典型であろう。彼はオランダの医術に興味をもち、長崎の通訳の警告によってもあきらめず、本当に一から、あるオランダの書物を翻訳する。それが後に発表される解体新書の原形となるのだ。その当時の日本の、外国のものに対する偏見は、やはり強かったのであるから、その異国のものにひかれる気持ちは、彼の生活全体に重くのしかかったのであろう。

しかし、そんなことをものともしなかった彼の回りには、またそれに輪をかけた仲間が集まり、この大事業が成し遂げられた。

今まで伝えられてきた漢方医書の中の解剖の図が、全く根拠がなく信じられないことだと知った時の驚きや怒りは、ひとしおでなく、彼らの若い心の新しい活力ともなった。若い情熱というのは、時折り、恐いほどの事態の好転を見せるのである。

「為すべきことはもとより人にあり、成るべきは天にあり」の喩。玄白らが、この言葉をかみしめながら、翻訳が思うように進まない苦しみを耐えていたと考えたと、この喩は、真の人生の凝縮のように思えた。

現代の人間は、どうしても現在ある事象を当然のことと考え易いが、やはりその発展してきたものの記念碑になっている古人の存在を認めた上で、その事の真の意義について、深く見詰め直してみる必要があると思う。

ひたむきさというものが、昨今ほとんど見うけられ

ないような気がするから。

4土 小 野 昭 男

私は、今までに、好んで文語体の本を読んだことはなかった。もちろん古典などの授業における読本はべつとしてである。理由は、単純明快である。同じ日本語でありながら、我々が日常使っている言語とは、異質なものであるかのように、読んでいてびんと伝わって来ないからである。はっきり言って何が書いてあるのかわからないという有様だからだ。こんなわけで、いつか岩波文庫をひどく避けるようになった。であるから、現代訳にしたものではなく原文のままこんな長文を読むのは、初めてのことである。

感想を初めに述べるのと次のとおりである。

まず第一に、読んでいてもあまり熱中できるような興味をひくものではなかったということである。これは、私の無学の為の一語につきるわけであるが、意味深い部分や、筆者が、最も言わんとしている所が、よ

くくみ取れなかったりして、私が、普通、読書している時のように、私の心に訴えるようなものが感じられなかったからである。

また、この本は、筆者である杉田玄白が、83歳の時に書きつづった回想録であるので、場面が所々変わって、話の筋道がよくつかめなかったりしたから。

私は、ここまで、この本に対して、無味乾燥なことばかり述べてきたが、もちろん驚いた点も幾つかある。

現在、私は、語学を勉強している。辞書も参考書も図書館や書店へ行けばすぐ手に入る。そして、語学で最も大事だと思われるその国の生の声（発音）を聞くこともできる。現在の私たちは、語学、いや医学でも何でも知識を得るための環境には恵まれている。しかし、私は、こんな身近なものさえも活用していない。筆者の時代は、何もない時代だったというのに、私は、この本を読んで、人間やる気だ、と思った。人間やる気になれば、何でもできるんだ、ただ甘えて、そのやる気を出さないだけなんだと言われたような気がする。

私は、今まで、自分に都合の悪いことや、つらいことを避けて来たようだ。これからは、どんどん何事にもやる気を出して全力でぶつかって行きたい。

夏休みの読書 その二

「坑夫」 (夏目漱石)

(角川・新潮文庫)

3M 清 野 雄 二

漱石の文章は読んでいて飽きがないのと、何となくさっぱりしたところがあるからいい。「猫」にしても「坊っちゃん」にしてもこの事は理解されてよいと思う。特に前期の作は、マンガを読んでいる気さえしてくる程で、多くの人に人気があるのもうなづける。

ところが、この作あたりからそういう要素がなくなり、人間の意識の暗闇に入り込み、その奥底をとらえようとしている事がうかがえる。

この本には「坑夫」という題がついているが、漱石は実際には坑夫というものを外から書いている。筋は、家出した19歳の主人公が、ポン引きなるものに誘われ、足尾の銅山に行き、翌日坑内を案内される、といったものだが、この主人公は実際には坑夫にならなかった。だから坑夫というものを内からではなく外から書いたのであるが言ってみれば、これは主人公の坑夫生活見学記・坑内のルポルタージュというところだろう。そ

れと、最後のところで分かるのだが、これは思い出を語る、といった形式を取っている。しかしだからと言ってこういう小説に特有の生々しさといったものは、全くうすらいではない。前に、井伏鱒二の「黒い雨」を読んで、その中に出てくる腐った死体の描写の部分で、思わず吐きそうになった事があったが、生々しさではこの「坑夫」も決して「黒い雨」のそれに劣らないように思う。特に坑道を進んでいくあたりは、その情景が一つ一つ目に浮かぶ程、事細かに書かれているのに感心した。

とにかく、そういう点からも漱石の作風は変わってきている。

自分にとってこの一冊は、夏目漱石という一作家の変化を見る事のできた貴重なものになった。

天平の藁（井上 靖）

（新潮・旺文社文庫）

3 M 阿 部 尚 彦

私が何故この本を読もうとしたか。まず、それは飽く迄単純な意志から出発している。というのは、ある現国の講義の時間にこの本についての内容の説明があったからであり、元来読書は好きであったのだが、読む物のジャンルと言えは推理小説でありSFであるものだった。それでも、この本を読もうとしたことについては自分でも不思議なくらい何の抵抗もなく受け入れてしまったようだ。

前置きはさておいて、感じたことを述べていくことにする。

私が第一に思ったことは、当然のごとく遣唐使の発遣のことである。当時の造船技術など現代から見れば、まことに幼稚であったろうが、当時としては最高水準だったのだろう。つまり、無事唐土に着ければ良いが命がいくつあっても足りないことになる。また、運よく唐に流れ着いたにせよ、祖国日本に帰って来るのも危険を犯すことになるし、次の遣唐使が唐に着くまではこの見知らぬ土地で何十年も学問をしなければならぬ。言葉も異なれば、習慣も違うだろう、その他諸々の苦難があることだろう。そういった様々の危険を犯してまで唐に留学する意味があるのか。命を賭けるだけのものがあるのか。ということがまず最初に思われた。これは文中でも遣唐使として選挙された普照が、悩んでいたことに等しいことであった。

では何故彼らが命を賭けてまで唐に留学したか。私なりに考えて見たことは、ある者は役職から仕方なく行かざるを得ない立場であったかも知れないが、若い留学僧等は、今旺盛を極める長安や洛陽を一目見るために、また学問の師を求めると命を賭けたのではないだろうか。そういった好奇心や向学心がなければこのような冒険をするはずがない。またそれに、それぞれの人々が使命感めいた物を心に秘めていたのかもしれない。

登場人物は、それぞれの人生をこの未知とも言うべき唐土で送った。中でも興味を引かれたのは、戒融と業行であった。戒融という若い留学僧は、学問をしているだけでは何も得るところがないと思いついて、この広大な国を旅してこそ得るところがあると思いついて旅に出る。私は、この行動的な所に一種の共感を覚えた。それはあたかも、男のロマンを求めつつけているようにも見える。ところが実際は、そんな夢物語のような

生優しいものではないはずだろう。この人物とは正反對の業行という僧侶は、唐土に30余年あまりいて、自分には学問の才がないということからもっばら写経に骨身を削っている人物である。彼は、日本に帰国する際に人生の大半を費やした経典とともに、海の深淵となる。私は、いったい何のためにこれだけの苦勞と時間を費したのかというような、彼の悲惨な最期に考えさせられた。また、人の運命ほど無慈悲で儚いものはないと感じた。

鑿真和上については、戒融の師として日本へ渡るべく幾度も試みたが、ことごとく失敗に終わり目は盲目になってしまう。それでも諦めず十数年経て日本へ渡って来る。その岩をも貫く一念と行動力に感服するばかりである。何か、物事は最後まで遂行するというような教訓めいたものを感じざるを得ない。

また、鑿真と最後の最後まで行動を伴にした、高弟たちにも心を動かされるようなところが数多くあった。

最後に、私の感想は断片的になっていつも埒があかないが、この本を読んでみて日本の古代を垣間みたような気持ちになった事は言うまでもない。

3 E 荻 野 和 久

この小説は、第9次遣唐使の中の留学僧、普照・栄叡・戒融・玄朗らの事を中心に、鑿真の来朝という古代日本史上の大きな事実を書いたものである。

僕は、この四人と、鑿真、そして、業行という入唐してから30年近くなる僧の考え方や生き方に、考えさせられた。

四人の留学僧のうち結局、日本に帰りついて来たのは、鑿真と一緒に来た普照ただ一人であった。栄叡は、鑿真の渡日に一番熱心であったが、何度かの渡日失敗で疲れはて、病死してしまい、戒融は、留学僧の身分を捨て托鉢僧になりあちこちを歩き回り、玄朗は、還俗して唐の女と結婚して、唐土に落ちつくようになってしまう。業行は、渡唐してからの20数年間を写経に没頭してきたが、日本にあと少しという所で、龐大な経文とともに海底に沈んでしまうのである。僕はこのあたりが何とも皮肉であると思った。伝戒の師を請じることにはそれほど熱心でもなく、栄叡にひきずられていた感じが強かった普照だけが無事帰ってこられたからである。また、業行が自分の人生のうちの大半を費して写した経文や、彼の努力は、一体、何の役に立ったのであろうか？ このことを考えると僕は非常にく

やしい思いになってしまう。

しかし、彼らの努力は、ぜったいに無駄ではなかったと思う。いや、彼らだけではない。唐に着く前に難破してしまい、何も出来なかった人々も、けっして無駄な死ではなかったと思う。おおげさかもしれないが、彼らの魂は、無事に役目を果たした人々の心の中に生き続けたと考えたいような気もする。

当時の人々の苦勞など、僕にはわかろうはずもないが、人は自分の意志を最後まで、つらぬきとおす事が大切だということが、わかったような気がする。業行は当時の日本では、一字一句の誤りもない経文が必要と考え、榮叡は、伝戒の師が必要だと考え、戒融は、日本より、唐においてあちこちを歩くことを自分の生涯と決めたように、一つのことに燃えることが大切であるように感じた。

二十歳の原点ノート (高野悦子)

(新潮文庫)

3 E 神 田 和 義

たしか、この本の存在を知ったのは今年の正月だったと思う。中学の時仲の良かった友達と話をしていてこの本の名が出て来た。すぐに読みたと思ったが、そのとき読みかけの本があったのと、それよりなんといってもこの本が日記調で書かれているということがひっかかっている、結局夏休みになってしまった。今となってはもっと早く読んでいれば良かったなと思わせる本である。

本の内容は、著者高野悦子の中学二年の終わり頃からの日記で高校時代へと続く。まず彼女の性格から紹介すると、彼女は内気というよりも自分を冷静に見つめる目と人を暖かく見守る目を持っている。たとえば、人を尊敬できるようになった自分をうれしく思い、反面、理想ばかり高くて実行があまりよく行われていないと自省し、自分は最低な人間だと思ふ。また、彼女は他人の言動に鋭い批判を持ち、より一層の理解力を持つ。自分に一番必要なのは自分を強めることだと思ふ、具体的にはどうしたら良いかわからないが、一瞬一瞬を強く生きようとする。いつもそういう気持ちを持って生きなければならないと思ふ。自分の欠点に気が付いた時、自分をはずかしいと思ふ、こうした方が

良い、こうしなければならないとすぐ自分の道を見つけ、一步步進んでいく。また、かわいそうな友達を心配して、思いやり、自分がその友達にとって出来る限りの良い友達になろうと努力する。

読んでいて自分はずかしいと思ふ。彼女よりも5年という長い人生経験を持ちながら足元にも及ばない気がする。

また、彼女は、他人といざこざがあると、まず自分は他人にとってこんな人でなくてはならないと思ふ。そして他人にもこんな人になってもらいたいと思ふと書いている。普通の人だったら他人にこんな人になってもらいたいの一方通行だろう。ここに人間性の違いが現われる。人間らしさを失わないためにはどうしたらいいだろう。私はどう生きていいのだろうか。人と人との友情について、自分と友達のあり方について毎日悩んでいる。

中学三年の10月に校内の英語の暗誦大会があって、そこで彼女の友達が優勝する。彼女はその友達はうまいのはうまかったが、発音が少しおかしいと思ったので優勝するのはおかしい、と思ふ。そして自分は、将来英語を話せるようになりたいと、英語だけは頑張ろうとしていた。それで残念に思ふ。その自分を顧みてそれではいけないと思ふ、すぐに、彼女はその友達に「優勝おめでとう」と言う。

誰でも、人は他人より優れていたいと思ふ。それが故に、自分より他人の方が優れていることがわかった時は悲しい。そこで、自分の気持ち、欲望を抑えて他人を賞賛する彼女はすばらしいと思ふ。それにも増して、他人の優越を素直に、自然にうれしく思うようになりたいと思ふのはもっとすばらしいことである。

僕の中学時代はというと、ただ義務教育であるが故に学校に行き、一日の三分の一を使い果たし、三分の一は遊んだり、たまには本を読んで、残りの三分の一は眠ることに使った。人並みに笑い・悩み・おこり・悲しみ・泣いたが、それは人のためではなく、すべて自分のためだった。反面、人の目を気にしてはこそそと小さく生きていたように思ふ。今もなんの変わりはない。自分を見つめること、他人を広い目で見る、生きがいを持つこと、それらがあまりなされていなかったように思える。

彼女はずっと自己を冷静に見つめ、また自分自身のことだけで精一杯にならずに、広い目を持ちつづけていく。「人間は自分に厳しくなければ人間らしくならない。私にはその厳しさが無いのです。何事も真剣に当たる。その厳しさを持って生活したい。いや、するつもりです。」と書いている。高校一年の時、自分が先

神通川（新田次郎）

（新潮文庫）

3M 永井 慎 一

天性心臓弁膜症だということを知りながらも、なおバスケットボールが好きだからといってクラブに入り、苦しい練習に耐え、くじけず、毎日日記という友達を相手に自省をつづけながら、勉強とクラブを両立させて強く、そして真剣に生きて行く。悲しみに打ち沈んでしまっはいけない。起き上がらなくては、自分が選んだ道は自分で歩まなくてはならない。

正直いうと、読んでいて早く終われ、早く年をとってくれ、ただそれだけだった。自分より彼女の方が年が上なら、これを励みとして、これから自分がそれ以上の人間になることができる。しかし年下であるということは、より高い人間性を見せつけられて、打ち砕かれ、失望し、自分は高校三年失格に思えたからである。なんて自分は悲しい人間なんだろうと改めて強く思う。なぜ自分より優れた人を尊敬できないのだろう。なぜ学ぼうとしないのだろう。もっと素直になろう。もっと、物事に対する意見と行動への勇気をもとう。僕は若いのだから何にでもぶつかって経験していくことが大切である。失敗をおそれず、積極的に進み、その経験を土台にして積み重ね積み重ね、さらに知識を加えて強く大きく生きていかなければならない。

最後に、彼女は高校から大学へと進むわけだが、彼女の読書量というのは大変なものである。毎日毎日日記を書きつけながらもかなりの本を読んでいる。読書は人の生き方を教えてくれる。もっと本を読まなければならぬと思う。

本文中に武者小路実篤の非常に感動させられた詩があった。

もう一息

もう一息

もう一息という処でくたばっては
何事もものにならない。

もう一息

それをもう一息

それに打ち克つてもう一息。

もうだめだ

それをもう一息

勝利は大変だ

だがもう一息。

—実篤—

かつては、どこの川も川底が透き通っていて魚が泳ぎ回り、その水は手ですくって飲めたにちがいない。富山平野を流れる神通川も例外ではなかった。

神通川のイタイタイ病は、公害病第一号に認定されたことで知られる。復員してきた熊野は開業医となり、その地方の骨がぼろぼろ折れる病気の患者の診察とその研究を始めた。しかし、原因がつかめず彼の母校の大学の教授に協力を求めたが原因はつかめない。彼は、「素人考えだが水に原因があるのでは」という患者やその教授の遺言のようになった「君の考えている水に原因があるかもしれない。」という手紙をうける。以前にも水を検査してもらったが飲用にさしつかえないという。名のとあった教授に依頼してみるが栄養不足と過労という通俗的な発表しかしない。名のとあった人間とか地位の高い人間というものは、一般的な考えしかできないものだと思ふ。そして、新しい考えなど言えないものだと思う。そんなことを言えば批判されるだろうと初めから考え、取り組んでみようともしないのだ。自分の名声は、地位は、と考えるのが先なのだ。

しかし、熊野は十年間の研究結果から、神通川上流にある亜鉛工場からの廃水のための鉛毒が原因だと医学会に発表する。が、一人の拍手にもむくいられなかった。数日後、水を分析してみたいという手紙が届いた。スペクトル化学分析で、結果は異常なほど多量のカドミウムを発見するのである。

明治・大正・昭和と文明が著しく発展し、自然の破壊、公害を顧みなかった。自己の利益ばかり考え、道徳を見失ってしまう人間は悲しい生きものだ。イタイタイ病・水俣病・阿賀野川水銀中毒・四日市ぜんそくなど名まえのついた公害病のほか、現在研究中のものや発見されないものも多々あるだろう。そして、それらにより自然、動物は刻々と今でも侵されつつある。

さて、ここらで一度みんなが振り返ってみるべきだ。そして、これから先どうすべきかじっくり考えてみるべきだ。これは、他人にたよってははいけない。権力、地位のある人たちにたよってははいけない。「何々大学医学部教授というようなもっともらしい肩書きを持つ人達より、一開業医のあなたが、はるかに大きな仕事ができるということを証明させてやりたいのだ。」という文章は、著者自身の言いたいことだろう。自然を深

く愛した著者が自然破壊の行き過ぎに対して、この文章を通して告発しているのだ。そして、我々に目を開いて行動しろと言っているのだ。

竜馬がゆく（司馬遼太郎）

（文春文庫・全8冊）

3 E 中山俊彦

何と言いつわらいたらいいのであろうか。とにかく文章のうまさには感心させられた。文庫本8冊という長編にもかかわらず読んでいて飽きたといった覚えがない。軽快なタッチで話が進められ、それにぐいぐいと引きずり込まれ、気付いた時にはもう読み終えていた。作者、司馬遼太郎の才能としかいえない。

しかし、私が引かれたのは文のうまさというよりも、むしろ「坂本竜馬」という人物そのものだったのかもしれない。

坂本竜馬。1835 - 1867。この数字でもわかるように、彼が生きたのはわずかに32年間なのである。現在、日本人の寿命は70才とも80才とも言われている。それからみれば32年というのは何と短いであろうと思うかもしれない。だが、長生きするということにどんな意義があるというのであろうか。重要なのはただ長く生きるということではなく、生きているうちに何をしたかということなのではないか。たとえ短い一生ではあっても精いっぱい生きたのなら、そのほうがずっと重みがあるように私は思う。彼、坂本竜馬がまさにそれなのである。

竜馬は幕末の風雲の中を駆け抜け、そして散っていった。ただそれだけなら何も竜馬に限ったことではなく、その時代数えきれぬほどの若者が尊皇攘夷の名のもとに倒れていった。いわば、竜馬もその若者たちもみな同じようなものである。しかし、日本史ことに近代史を語るうえでどうしても忘れてはならないのが坂本竜馬の存在なのである。

竜馬は土佐藩の郷土の家に生まれた。当時はまだ尊皇攘夷運動も起こってはいなかったため日本はまだ平和であった。そして竜馬が江戸へ剣術修行へ行くあたりから時代はしだいに暗雲に包まれてくるのである。

江戸で竜馬は北辰一刀流を学んでいたが、その時彼は、その後の彼の運命を変えてしまう人物「勝海舟」と知り合っている。人間の巡り会いは不思議なもので、もしその時勝海舟と知り会っていなかったら32才

という若さで死ぬこともなかったかもしれないし、日本史もずい分変わってしまうところだったろう。だが彼は勝と知り合い、そして自ら幕末の風雲の中に身を投じてゆくのである。

だが、他の尊皇攘夷者が武力兵力をもって幕府を倒そうとしていたのに対し、彼は、彼一人は別なことを考えていた。彼には幕府など眼中になく、あるのは倒れかかっている日本の姿だったのである。だから武力で幕府を倒すことよりも平和的に幕府に大政奉還させ、いち早く新しい政治体系をつくるのが日本を救うことだと考えたのである。そのへんが彼らしいというか彼しか考えつかなかったことなのである。つまり時代を一步先取りして見る目、それが彼には備わっていたのである。すばらしいことだと思う。

そして、彼は日本を救うために奔走し、ついに大政奉還を成功させ維新まであとわずかという時に幕吏によって暗殺されたのである。

もし彼が生きていたなら、今の日本はずい分変わったものになっただろう。だが、歴史は変えられない。

私はこの本を読み終え、しばらくの間は頭の中がボーッとしていた。それほど竜馬の印象が強烈だったのである。またそれと同時に、読んでいくうちに竜馬が親しい友人のように思えてしかたがなかった。それは、作者の力量によるどころも大きいかもしれないが、それ以上に、竜馬の持つキャラクターが私の理想とするものそのものだったからなのだと思う。

私は、この本の中で最後に書かれている文章が、竜馬の一生を最も端的に表現していると思えてしかたがない。

天に意思がある。

としか、この若者の場合、おもえない。

天が、この国の歴史の混乱を收拾するためにこの若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜しげもなく天へ召しかえした。

和解（志賀直哉）

（各文庫）

1 M 小林 晋

つい最近、祖父に勧められて、朝日新聞の隅に、連日のように載せられている「天声人語」を読むようになった。自分は、これから夏休み中に、読書感想文を書かなければならないが、その前に、たいへん勉強に

なったことが、ある日の「天声人語」に載せられていた。

次のようなことだった。

「夏休みの一日一日は砂時計の砂のようにみるみるなくなっていく。8月を迎える前に、この夏休み中に自分はいったい何をしようとしているのか、もう一度たしかめてみよう。ある人は、せめて夏休みの時ぐらい本を読めといい、ある人は虫や花の観察記録を続けよという。注文過剰でいささか食傷みだろろうが、夏休みにはやはり、道草をたのしむ心を養ってほしい。無用の用ということに心を向けてもらいたい。本を読むにしても、日ごろの勉強に直接結びついたものではなく、夏休み中はとくに、できるだけ広い分野の本を読む習慣を身につけたい。専門分野以外の本を読んで、脳に新しい刺激を与えよう。そして一冊でもいい、古典の中から夢中になって読める本をさがそう。テレビの普及はせいぜい30年の歴史しかないが、論語や老荘の教えやイソップ物語は2千年以上の歴史をもつ。般若心経は何千万いや、何億もの人々に読みつがれてきた。風雪に耐えてきたものには、深い知恵がひめられている。」

以上のようなことが載せてあったが、これによって、自分はなぜ先生がこのような読書感想文を書かせたりするのかがよくわかる。たしか、なにかのコンクールに、いい感想文を出すから、書いてもらいたい、とはいていたが、それが、本当の目的ではないと思う。たぶん、マンガしか読まないぼくたち学生に、少しでも多くの本を読んでもらいたいということが、本当の目的でなかったのではなかろうか。

さて、自分は志賀直哉の「和解」を選んだ。理由は、というと、なんのことはない、出題された本の中から、目を閉じて、指を指した時に、この「和解」の二文字が現われた、ただそれだけのことである。

読んでみて、まず最初に、作者と現在自分との境遇があまりにもへだたりすぎていることに困惑してしまった。

自分の生いたちを洗いざらい告白してしまうと、両親とも、公務員の為に、一般家族の子供達には、味わうことのできない、寂しさ、悲しみも、多く経験済みである。父は非常に厳格ではあるが、反面、とても温情あふれているので、恐ろしく思われたことも時々あるが、近頃は、むしろ尊敬している面の方が多い。母は、あくまでやさしく、慈母そのものである。この両親の間のたった一粒の種が自分、それこそ大事に大事に育てられて、今日に至っている。

それに比べ、この「和解」における主人公の作者

が父や母がいるにもかかわらず、封建時代の遺風から、祖父母の手に育てられたということが父と子の対立し合う原因になっている。また、この本にでてくる作者の母は、実の母ではない。

このように、作者とぼくを見くらべた場合、比較的、経済的に恵まれたくらしをしている自分と比べると、作者は、とても苦痛だったにちがいない。自分は、あらためて、両親と現在の時代と境遇に生まれてきたことに感謝している。

他に、作者の表現法のうまさをみのがしてはいけな。特に赤児の死を描くところなどは、まるで、ビデオにでもとったように、一つ一つの行動を実に繊細に描きだしている。自分は、このことに深く感動した。

もう一つ、自分は、作者の性格に興味を持った。この本の中で、作者は、何回も腹を立てている。また、ちょっとした苦痛で、どこかに出かけたり、住む所を変えたりする。自分は、作者が短気で、神経の細かいことに、おもしろみをもった。

自分は、これを契機に小説を読んで、文豪の高い精神内容の一端でも味わうことができれば、と念願している。

注文の多い料理店 (宮沢賢治)

(各文庫)

IC 渡部 均

初めて「注文の多い料理店」という題を見た時、私は興味をもった。そして、この本を読むことに決めた。その理由の一つとしては料理店ということばにひかれたからである。注文の多いというほどだからさぞかし食欲のわく話だろうと思った。登場人物は、二人の若い紳士である。ある日二人が猟に出て路に迷い、つれの犬も死んでしまった。空腹の二人は「西洋料理店山猫店」という札を見つけ、中にはいるのだがこの料理店は扉がいくつもありあけるたびに文字がかいてあるのだ。それには「何々をしてください」とかいろいろなのが書いてある。

私は、あなるほどこれが注文の多いということなのだろうかと思った。つまり、客が料理店の主人に対して注文するのではなく、主人が客に注文しているのである。結局西洋料理店というのは、西洋料理を来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にし

て食べてしまう店なのである。普通のこのような話ではなんと恐ろしいことだろうと思うはずなのにこの本では、そんな気持はなく、人間が料理されるというこっけいさがでていと思う。この人間を食べようとしているのは、山猫である。二人はやっとそれに気づいたがもうおそかった。泣いている紳士を私はあまりかわいそうに思わなかった。二人は、たぶん金持ちで遊びのため猟に来たのだろう。そして、鳥やけものを殺してはもって帰って、食べるということをするのだろう。そのような目にあう動物たちのかたきをとろうと山猫が「ようし、人間がその気ならこっちも人間を料理して食べてやる」という気持ちになったにちがいないと思ったからである。

ここが宮沢賢治の作品のおもしろさだと思う。読者を童話の世界に吸いこみ、自分自身もそこに吸いこまれる。また注文の多い料理という作品は、自由にのびのびとかいていと思う。

ここでは、山猫・犬などが出てくるがどれも人間の一人として描かれているし、人間と同じような感情を持っているために動物に対する親しみが出てくると思う。それに、人間を動物が食べるということに、ちょっと不自然さが感じられない。

話の最後は、かい主の死んだと思った犬が二人の主人をたすけ、店は、けむりのように消えて、二人は、安心して東京に帰るといところで終っている。

作者、宮沢賢治は、ここで何をいいたかったのだろう。たぶん、この作品は、動物をとおして、人間生活を風刺しているにちがいない。あまり動物を大切にしないと、いつか動物に支配されるかもしれないと私たちにちゅうくくしているのである。これは、人間と機械にも同じことがいえると思う。そんなことを作者は、この作品をとおしていいたかったにちがいない。

作者の心の中はメルヘンの世界でいっぱいにはちがいない。ふつうの人には、あまり考えつかないことを平気でやっているように思われる。これは、作品の魅力であり『注文の多い料理』にも数多く盛り込まれていると思う。

そのようなことが私たちに伝わり知らず知らずのうちに童話の世界に吸いこまれてしまうのである。

また、作者の独特のことばづかいやさし絵なども、なんとなく読者を引きつけるものである。

『注文の多い料理店』というのは、読めば読むほど豊かな心が養われる作品だと思う。

作者は、そんな人になることを願って書いたにちがいない。

私はこれを読み終った時、改めて、動物に対するや

さしさが大切だということを教えられた。

風立ちぬ（堀 辰雄）

（各文庫）

1 C 鈴 木 淳

僕がこの小説を読み始めたのは、人間の一生というものに対して疑問を持った頃だった。もちろん、その疑問に答えが出たわけではなく、一つの考え方というものが見えたような感じがただけだった。それでもこの小説を読んでよかったとは思ふ。

この「風立ちぬ」を読む前に「美しい村」という作品を読んだが、それはK村（軽井沢あたりではないかと思う）を、一人の青年が何年かぶりに訪れ、その頃を思い出しながらも、一人の少女と出会ったことが堀辰雄独特の感覚で美しく描かれている。だが、僕はこの「美しい村」は小ぎれいにまとまった室内楽のようなふう感じただけだった。僕の心にカチッと来るものがなかったからかもしれない。

その点「風立ちぬ」は、やはり堀辰雄の繊細な描写によって書かれてはいるが、そのテーマと視点がちがうような気がする。多分、「美しい村」で出会った少女が、ここにも登場していると思うが、作家の青年と肺を患った少女の、幸福と呼べるかわからないサナトリウムでの生活が中心となっている。この二人が世間から離れた山でしている「すこし風変りな愛の生活」というものが、少しうらやましいと思う時があった。僕もこの忙しい学校生活から抜け出して、そういう山の中でひっそりと生きてみたいと考えてみたりもした。

僕は、日本アルプスの中では北アルプスの立山あたりが好きだが、この小説に出てくる南アルプスも行ってみたいとなった。あの美しい自然のなかで、二人はどの位まで生死を見つめたのだろう。死んでゆく者の目に自然が本当に美しいと思えるというが、それは生きている僕たちが感じるより何倍も何十倍も美しく見えるのだろうか。

その少女の短い一生がもうすぐ終わろうとするその頃、婚約者との二人の生活がそういう少女にとってどのように時が過ぎていったのだろう。どこか幸福に似た感情はあったらろうとは思ふ。

やがて、少女はその一生を終る。そして、青年は、少女と初めて出会ったK村へ彼女が死んだ冬から一年後に三年半ぶりに訪ねる。一人で山小屋で冬を暮らす。僕は、この青年が世界から離れて生活できる事が本当

にうらやましいと思う。悲しみが透明なものになって、不幸とも幸福ともつかない気持ちでいられるのだろう。

病気のか弱い彼女が、青年にとってそうでないよりいとしいものにしてしているという事がわかりそうな感じもする。作者の姿が、この青年にだぶついている事は確かだ。堀辰雄はこれを私小説にはしていないのだろうが、それでも行動が似ている。堀辰雄はかつて療養所に入院したことがあり、彼自身もあまり体は強くないらしい。だから、自分より弱いものがいとしくさせる、という事は僕にも見当がつく。

この小説の終り方は、とても悲劇的なのだが、読み終った時、それほど悲愴感はなかった。悲しくはないが、何か考えさせられた。それは物語の中のことだけでなく、僕がこれまで生きてきた道を振り返らせた。いろんな人が僕と出会い、別れていった。青春にとって出会いと別れ、愛と死とはいったい何なのだろう。みんな風のように心の中をかけ抜けていった。あの頃の同級生たち、同じ教室で机を並べた友だち、交通事故でこの世を去った僕の友だちや同級生だった女の子。この小説を読んでから、まるで関係もない方向に心は動いた。だが、僕はこう思う。それが今の僕にとっての「風立ちぬ」なのだろう、と。

どくとのマンボウ航海記 (北 杜夫)

(各文庫)

1 E 熊 谷 好 市

な、なんと信じられないと思うが、ぼくは今までに文庫本といわれているものを三冊しか読んだことがない。その三冊めに買ったのが「どくとのマンボウ航海記」であった。

今までなぜ、ぼくが文庫本を敬遠してきたのかというと、それは一般に文章の表現がぼくの性格と一致しないからである。つまり、やさしく言えば、「美しく繊細な表現」とかいうものはとてもじゃないがぼくは好きになれない。また、さらに話の内容も問題である。文学作品などはおもしろくない、という先入観がぼくにはあり、それでもいちおう某作品を読んだのだが半分ぐらいであきてしまった。内容がつまらないのである。

そこで、ぼくは、自分の好みに合った作品、たとえば、冒険物・娯楽物・SFなどはないかと先生にいただいた目録で探したのであった。そして選んだのが、

「どくとのマンボウ航海記」であった。目録の解説をみるとユーモアがどうしたとかベストセラーになったとかかいてある。

ぼく自身も何年前、どくとのマンボウ航海記がかなり売れている、というようなことを聞いたような気がしていたし、友達の話によればおもしろいからぜひ読めというので、それでは、まあ読んでみようかなという軽い気持ちで本屋へ買いに行ったのだった。

そこで実物を見ておどろいた。本がかなり厚いのだ。そして中をひらいてみるとちっこい字で一ページにぎょうさんかいてある。こんな本、ほんとに読みきれんやろか、と心配になってきたのだった。しかし、ぼくは240円を払い家に帰ってきた。つまり買ったのだった。そしてその夜さっそく読んでみた。そしたらぼくのきらいな表現がなく、冗談などもまざっててあんがいぼくをあきさせないのであった。そして読んでいて気づいたのだが、これはけっこう前にかかれたのではないかと思った。そして裏表紙のあたりをみると昭和40年発行とかいてある。「なんや、すると今は昭和55年やさかい、15年もたったんか」とぼくは思った。どういうわけかしらんがぼくは「どくとのマンボウ航海記」はつい最近かいたのだと思っていた。そういえば見たこともないむずかしい漢字があったな、とも思ったのであった。そして、そのときに「こういうむずかしい漢字には読みがなぐらいふたらどうなんや、まったく新潮文庫はサービスが悪いわ。おまけに角川文庫は220円なのに新潮文庫は240円と20円も高いわ。このゼニの亡者め」などとバカなことをぼくに考えさせたのだった。しかし、ここまでこの感想文らしきものを読んで「どくとのマンボウ航海記」の内容についての感想が書いとらんとぼくは思うのだが、しかたがない。まだ、ぼくは本を228ページあるうち164ページまでしか読んでいないし、読書感想文などというものはきらいなわけではないが、本を読むのがきらいなのでかけるわけがないのである。

だいたいぼくは「どくとのマンボウ航海記」をかいたのはムツゴロウとかなんとかいられている畑さんとかさんだとばかり思っていたのだった。それで本の表紙に北杜夫とかいてあってそれをみて「この人だれや?」とぼくは思ったのだった。そしてその次に「羅生門をかいた人かな」と思ったのだった。まあ、ぼくほど本を読んだことのない人もめずらしいかもしれん。

こりの64ページを読んでしまおうと思っとる。

しかし、ぼくも文庫本は読まんが、週刊誌や月刊誌を読んどるさかいかまへんと思うんやが。まあ今はの

視聴覚教育設備について

副館長

工業化学科 小 磯 武 文

本校図書館は学生諸君の知識・情報源の中核として活発に活動していますが、一方視聴覚教室を拠点として種々の機器を駆使して教育の効果を挙げております。しかしどのような機械・器具が備えられているのか知らない諸君も多いようですので以下に紹介してみます。

1. 昨年度までに購入された機器(表Ⅰ)

品 目	型 式	台数
AV装置		一式
タイマー		2
カセットビデオコーダー	SONY VO-1720	2
OHP		2
ワイヤレスマイクロホン		2
テレビ		8
35mm映写機	エルモ 1000	1
8mm映写機	エルモ P-300 AV	1
16mm映写機	ベルハウエル 1658	1
スライド映写機	キャビンマルチワイド60	1
スライド映写機	ケントマルチタット 60	1
テレックス カセットコピー機	カセットコピーヤー I クラリオン MODEL-8181	1
カセットデッキ		1
LL/ステレオ カセットコーダー	SONY TC-2610	1
ドライコピーマシン	3M印 モデル 355	1
スライドプロセッサ カメラ	Panacopy KV-3000	1

2. 本年度購入機器(表Ⅱ)

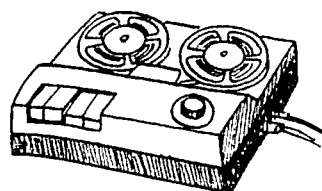
本年度はさらにビデオカメラを中心として表Ⅱに示されている機器が購入され充実した授業が行なえるようになりました。

品 目	型 式	台数
ポータブルカラーカメラ	ビクター GX-V7EZ	1
〃 三脚	GA-26	1
〃 キャリングケース	CB-P50	1
〃 延長ケーブル	VC-234-10	1

品 目	型 式	台数
ポータブル ビデオカセット	HR-2200	1
〃 キャリングケース	CB-P22 S	1
〃 バッテリーバッグ	NB-P1	2
〃 ACパワーアダプタ	AA-P22	1
カラービデオモニター	TM-41	1
〃 バッテリーバッグ	PBP-1	2
〃 ACパワーアダプタ	AA-P41	1
カラービデオカメラ	CV-G80	1
チューナーアダプタ	TU-22	1
カラーカメラ用同期結合器	GN-C80	1
6インチカラーモニター	CX-61	1
ビデオカセット	HR-6700	1
教材提示ビューア一部	AV 316	1
日立カラーカメラ	日立 VK-C800	1
録画再生機	ビクター HR-3750	1
照明用ライト		1
クローズアップレンズ	PX-1	1

これらの新しい機器の利用については使用要項が定められており学生諸君は直接借り出せません。要項に従って、各教職員が借り出して利用致しますが諸君も先生方を補佐して、これらの機器に触れる機会があると思います。

視聴覚の設備・機器といえますと、LL教室や各科にある映写機・テープレコーダー等がありますが、ここでは図書館所属のものについて紹介致しました。



よもやまばなし

• 他高専に比べて本校図書館の進み、遅れぐあいはどうだろうか — 「我がふり」を直す目安として「他人(ひと)のふりを見」たくなる。
 全国統計はまだできていないので、最近入手した、

「東海北陸地区国立高専図書館問題研究報告」の資料によって、岐阜・沼津・豊田・鈴鹿・富山・福井・石川の各工業高専と比べてみた。福井が40年設置であること以外、学校規模は本校と大体同じである。

(54年度末現在)

	蔵書冊数	貸出冊数	年度内増加冊数	貸出者数	1日平均入館者数	学生用図書購入費
最 多	46,053 岐阜	12,504 豊田	3,293 豊田	11,372 沼津	257 福井	5,675千 富山
最 少	36,769 沼津	4,104 岐阜	2,031 沼津	2,781 岐阜	50 鈴鹿	3,506 石川
本 校	46,934	12,585	3,065	10,984	155	4,465

御覧の通り、本校は、「大体いい線を行っている」と自賛したくなる。が、図書館活動というものは、「多量、益々弁ず(多ければ多いほど、うまくこなせる)」のことわざ通りで、特に入館者数などの点は、更に向上を期したいもの。

• 世の高校生たちは今？

全国学校図書館協議会による第26回学校読書調査が本年6月全国各地の高校36校4,023名を対象に得たデータでは

- (1) 5月1か月に読んだ平均冊数(男)
 高1-1.3, 高2-1.3, 高3-1.0冊
- (2) 5月1か月に読んだ本ベスト4(男)

高 1		高 2		高 3	
復活の日	19人	復活の日	13人	青春の門	7人
ノストラダムスの大予言者	11	ノストラダムスの大予言者	12	人間失格	6
江戸川乱歩シリーズ	8	坊っちゃん	11	復活の日	6
老人と海	8	青春の門	10	老人と海	5

• 今秋、世評の定まった名著から

- 第7回 大仏次郎賞 = 物理学とは何だろうか 上下
 朝永振一郎 岩波書店
- 第28回 菊地 寛賞 = 折々のうた
 大岡 信 朝日新聞連載

第16回 日本翻訳出版文化賞

The Reluctant Admiral ; 山本五十六伝
 阿川弘之著, J・ベスター 訳 講談社

(註 他山の石 — 他山の石, 以て玉を磨くべし)
 一見、縁遠い物事でも、自らを高める材料になる。)



新着図書目録

※印は図書館 他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総記

福島民報縮刷版 昭和55年5・6月号 福島民報社
朝日新聞縮刷版 昭和55年8月号 朝日新聞社
私のなかの本 全国学校図書館協議会
住宅地図いわき市平・内郷版 日本住宅地図

吉川幸次郎編 漢語文典叢書5 汲古書院

東洋文庫

385 甲子夜話・続編6 平凡社
386 松本順自伝・長与寿齊自伝 同
387 玄玄書経集1 同
388 アラビアン・ナイトII 同

人類の知的遺産

13 ナーガールジュナー 講談社
46 ヘーケル 同

世界の名著

30 スピノサ・ライブニッツ 中央公論社
54 マルクス・エンゲルスI 同
62 グレンターノ・フッサール 同

哲学

ルソー全集6 白水社
パズル・ウォリー 創元社
イギリス精神の源流 同
日本哲学思想全書 平凡社
13 文字論一般篇 同
アウグスティヌス著作集 教文館
11 神の國(1) 同

歴史

カラー会津の魅力 淡交社
チモシエンコ 東京図書
チモシエンコ自伝 同
吉木英一 現代日本の都市化 古今書院
堀岸一 地図の風景 埼玉 群馬 栃木 群馬 同
日本の山河 同
21 天と地の旅 大阪 同
角川日本地名大辞典 同
21 岐阜県 角川書店

社会科学

都市空間の回復 学陽書房
西江雅之 サルの檻 ヒトの檻 朝日出版社

自然科学

雨量年表第26回 昭和53年 日本河川協会
光学技術ハンドブック 朝倉書店
河野伊三郎 位相空間論 共立出版
本間龍雄 組合せ位相幾何 森北出版
田村一郎 トポロジー 岩波書店
村上益夫 関数解析 朝倉書店
田村一郎 葉層のトポロジー 岩波書店
中国位相幾何学 共立出版
ヒルベルト ヒルベルト幾何学の基礎 クラインエルランゲンプログラム 同
J.L.Kelley 線形位相空間論 同
児玉之宏 位相空間論 岩波書店
中国位相幾何学 同
野口広 初等カテゴリー 共立出版
井筒茂志 現代数学・成立と課題 日本評論社
横山勉一 現代数学の基礎・群論概説 昭晃堂
ウラジミロフ 応用偏微分方程式2 文一総合出版
G.ストラング 線形代数とその応用 産業図書
W.W.ソーヤ 線形代数とは何か 岩波書店
中沢浩一 化学論文の書き方 廣川書店
須賀恭一編 有機高分子化学実験 丸善
大養茂 物理有機化学 三共出版
犬井織郎 微分方程式とその応用 コロナ社
船高伸倫 非線形偏微分方程式 産業図書
現代入文学講座 6 恒星の世界 恒星社厚生閣
ブルーバックス 433 さまよえる大陸と動物たち 講談社
434 SF思考のすすめ 同
435 数式を使わない力学 同
437 五次元の世界 同
438 深海底て何が起きているか 同
サイエンスライブラリ統計学 10 多次元尺度解析法 サイエンス社
サイエンスライブラリ数学 15 グラフの理論I 同
16 同 II 同
17 同 III 同
サイエンスライブラリ現代数学への入門 4 位相 同
16 位相幾何学入門 同
17 線形位相入門 同
18 群論への入門 同
19 代数入門 同
サイエンスライブラリ理工系の数学 11 トポロジー 同
13 カタストロフィー 同

基礎数学選書

14 計量微分幾何学 裳華房
数学解析シリーズ 朝倉書店
3 代数 同
共立数学講座 24 代数学 共立出版
数学叢書 26 ファイバー束のトポロジー 吉岡書店
数学全書 9 代数的位相幾何学 森北出版
現代数学レクチャーズ B-2 位相幾何学 培風館
紀伊国屋数学叢書 4 一般コホモロジー 紀伊国屋書店
知の革命史 1 科学史の哲学 朝倉書店
実験物理学講座 24 電波物性 共立出版
石田信 代数学入門 実教出版
竹之内隆 入門集合と位相 同
Robert A. Day How to Write and Publish a Scientific Paper Isipress
J.Sundermann Mathematical Modelling of Estuarine Physics Springer-Verlag

工学・技術

度量年表 第31回 昭和53年 日本河川協会
昭和55年度電気四学会北陸支部連合大会講演論文集 電気四学会
尿浄化槽の構造基準 同解説 1980年版 日本建築センター
第13回電気絶縁材料シンポジウム予稿集 電気学会
日本音響学会昭和55年度秋季研究発表会講演論文集 日本音響学会
昭和55年度電気四学会九州支部連合大会講演論文集第33回連合大会 電気四学会九州支部
昭和55年度電気四学会連合大会講演論文集 電気学会
昭和55年度電気四学会北海道支部連合大会講演論文集 電気四学会
太陽エネルギーの基礎と応用 オーム社
機械工学SIマニュアル 日本機械学会
エネルギー変換技術1980年版 日本科学技術振興財団
機械の事典 朝倉書店
非破壊検査便覧 日刊工業新聞社
改訂機械製作実習 技術書院
日本動物工業会編 造型技術の要点 コロナ社
須山正敏 電子計測 同
栗田稔編 画像のソフトウェア 同
吉田亨 アーク溶接実務教本 日刊工業新聞社
水沢昭三 技能指導溶接の実技 工学図書
小栗富士雄 回転設計ガイドブック 共立出版
柳山博明編 機能システム総覧 実業技術センター

E. Hinton
有限要素プロクラミンク 丸善
塚本尚久 機械製図詳論 技報堂出版
松水百吾 エンタルピエントロピ基礎 パワー社
L.J. セドフ 連続体力学1~4 森北出版
谷下市松編 大学演習工業熱力学 裳華房
白鳥正樹 数値破断力学 実教出版
J.T. オーデン 非線形連続体の有限要素法1 培風館
南出昇編 有機工業化学 化学同人
久保慶三郎 土木工学事典 朝倉書店
多谷虎男 力学におけるテンソルと変分解析 上 学会出版センター
太田静六 眼鏡機 日本と西洋の古鏡 理工図書
中村賀光 建設業界 教育社
新体系土木工学
39 鋼構造物の製作と施工 技報堂出版
53 地域計画I 計画の分析 同
62 道路I 計画と幾何設計 同
63 関 門 構造 同
77 砂防・地すべり・急傾斜地崩壊 同 券
83 港湾施設の施工 同 小
88 上水道 同 小
ブルーバックス
432 宇宙旅行と人間 講談社
436 電波に強くなる 同 小
439 噴型からの発想 同 小
日本機械学会編
技術資料管路ダクトの流体抵抗

日本機械学会
上田康太郎 木工(技術シリーズ) 朝倉書店
精密工学講座
10 塑性加工学 コロナ社
11 切削工学 同
W. ジョーンソン 塑性加工学1・2 培風館
朝倉機械工学全書
20 切削工学 朝倉書店
現代土木工学
3 土不総合計画論 丸善
エンジニアリングサイエンス講座
27 構造工学の基礎 共立出版
A. Pflüger Statik der Stabtragwerke Spring-Verlag
Janpahl Finite Elemente in der Baupraxis V.W. Ernst & Sohn
J. Stewart Stein Construction Glossary John Wiley
Constitutive Equations of Soils 土質工学会
芸 術
高橋清版画集 講談社
浮世絵聚花 小学館
16 東京国立博物館 小学館
日本古寺美術全集
10 延暦寺 圓城寺と西教寺 実英社
語 学
日本国語大辞典

1 あへうのん 小学館
2 うは〜かつほ 同
3 くれ〜さこん 同
4 かつま〜くるん 同
7 たけ〜とひん 同
Longman Dictionary of English Idioms Longman
文 学
上林鏡全集17 筑摩書房
有島武郎全集1 同
大岡昇平 文学の可能性 作品社
安取三義 石川啄木の生涯 上 下 彩光社
石川淳 江戸文学掌記 新潮社
司馬遼太郎 項羽と劉邦 上 中 下 同
新潮現代文学
7 おはん 雨の音 同
38 海辺の光景 花祭 同
61 冬のかたみに 帰路 同
65 寶樹時代 アポロンの島 同
明治文学全集
99 明治文学巨匠録(二) 筑摩書房
ロマン・ロラン全集
8 魅せられたる魂 みすず書房
短歌シリーズ・人と作品
1 正岡子規 桜楓社
10 石川啄木 同
12 高橋茂吉 同
20 近藤芳美 同
John Donne Holy Sonnets 研究社



御寄附の紹介

日章製作所 殿 (神奈川県綾瀬市)
図書券金一万円をいただきました。
今、NHKテレビで月1回放映され、各方面に大きな反響を呼んでいるシルクロード(絲綢之路)の記録全6巻を購入して、諸君の教養の向上に資することにしました。
閲覧室の展示戸棚でとりあえず、眺めてください。

読んでみませんか

913.6 石川啄木の生涯 上・下
(梁聚三義 彩光社)
南会津出身の著者が青春を賭けて啄木の足跡を求め霧笛の釧路や小樽を放浪した30余年辛苦の成果。
913.6 項羽と劉邦 上・中・下
(司馬遼太郎 新潮社)
前3世紀末、秦始皇帝の没後再び動乱期を迎えた中国に光芒を放って激突する二英雄、史記の世界。

会 議 録

<p>9月10日(水) 第6回委員会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 夏休みの利用状況報告 2. 図書検閲結果報告 3. ビブリア編集案 4. 必読書目を作る案 <p>10月22日(水) 第3回学生委員会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 書架整理援助案 	<ol style="list-style-type: none"> 2. 学生の希望意見 <p>11月4日(火) 第7回委員会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 視聴覚機器使用規定案 2. 故障機器の処理 <p>11月12日(水) 第8回委員会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書貸出方法の改善案 2. ビブリア編集案 3. 視聴覚機器使用要領案
---	--